



庭園全景 Panoramic view of Garden (‘18.10 北浦 義己)

本庭園は、台湾台中市政府からの出展要請を受け、株式会社田中造園土木が「2018台中フローラ世界大会(2018/11/3～19/4/24)」台湾台中市后里馬場森林園区に於いて、『水の七変化、流落溜湧走踊遊』をテーマとした日本庭園(300㎡)を出展したものです。

出店要請を受け、2018年8月に渡台し、出展説明を受けました。開催期限までの準備期間が短く、はじめは困惑しましたが、前回出展の「2010台北花博(インドアガーデン)」での現地パートナー 林海平(リンハイピン)氏が協力下さるということで、一先ず帰国し、準備に入りました。

開催地である台中は、台湾の中部に位置し温暖で比較的雨の少ないエリアです。水を使った涼やかで変化に富んだ庭園を来園者に楽しんで頂こうと思い、設計に努めました。

2018年9月上旬の現地打ち合わせで、使用材料の選定を行い、併せて造成工事と電気水道の設備配管等を現地スタッフに協力依頼しました。そして9月下旬、関西空港からスタッフと共に一路台湾へ。防水シートの敷設から始まり、約2週間で現地スタッフの協力の元、庭園を創り上げることができました。

工事においては、閉幕後に撤去することもあり、セメントの使用は極力控えた為、池泉部部分の石組工事には細心の注意を払いました。重心とバランスに留意した作業は、安定感のある自然な仕上がりを生み出しました。庭園のポイントは文字通り池泉回遊式の特徴である、視点場の移動による景観の変化です。テーマに沿った躍動する水の姿と動きを、滝流や護岸、州浜といった日本庭園の手法で表現し、ガーデンベルや噴水、汲み上げ井戸は庭の点景として、また、流れる水音は、庭に響きを与え、広がる水面は木漏れ日移す鏡となりました。

会期中は参観者の溢れる人気スポットとなり、PR用の映像にも採用されました。閉会式において、庭園景観部門の金賞を受賞したことは、関係者一同の大きな喜びです。(田中 明男)

通常総会

令和元年6月15日午後1時から、大阪歴史博物館4階講堂において令和元年度通常総会を開催した。正会員62名の内過半数の36名の出席となり、本総会は成立し、吉田理事長を議長として、提案された平成30年度事業報告および決算報告書、令和元年度事業計画案及び収支・支出予算案ならびに総会議決事項の委任は原案どおり可決された。総会終了後、理事会において吉田理事長から健康を理由とした辞意を了解し、後任に繁村誠人が就任した。また通常総会記念講演会として、福井県立大学長の進士五十八氏による「公園革命」-これからの社会と造園界への期待を議題とした講演会が行われ、併せて若手造園家をパネラーとした討論会を持った。

編集後記

東京、大阪をはじめとする大都市圏だけでなく日本中いや世界の隅々まで、新型コロナ対策ではみな息をひそめており、先が見えないというのは一番に気の重い。当センターでも、年度の後半の庭園見学会も中止した。東京オリンピック・パラリンピックの延期を筆頭に、少なくとも今年度前半はみどり関係の企画は総倒れの状態である。外に出ないでというよりは盛り場や人の集まる場所には出ないで、と言ってほしい。今こそ外に出て、「身近な公園のゆったり空間利用を」と思いたい。

日本の都市公園は、戦後人口一人当たり2㎡強からいまでは10㎡を超えた今、全国の都市公園の総面積は大阪府の面積の半分以上という規模である。当世、賑わいも大事だが、もっと開放感豊かな緑と広場に親しむという笑顔の空間づくりの発想への転換の機会にと望まれる。(事務局)

NPO法人 国際造園研究センター会報

No.17
2020
6月発行

先の見えない“新型コロナ危機”に対し、

再度 “温故知新” の姿勢で

理事長 繁村 誠人

ランドスケープに前向きな取り組みをしましょう！

今回健康上の都合ということで退任された吉田理事長の引継ぎということになりましたが、今後も当センターの顧問としてご指導いただける様、また今後のご健康とご活躍、感謝の意も含めてエールを送りたいと思います。特に庭園文化塾や二木サロンではいろんなことを教えていただきました。歴史小説と地形、地質図が大好きで、幼き頃京の都紫野で生まれ、その豊富な知識と感性から庭園とその保全を含めて次の世代に残す指導をされてきました。銀閣寺では地割の移り変わりによる池護岸石組みの技量の良し悪し。大河内山荘が亀山の植生に拘り生かした伝次郎の意図と遊びの紹介などいまの公園の設計施工に関しても学ぶべきことが多いのがわかります。また桂離宮の松琴亭では建物の内と外の隔てを取り除いた日本家屋の妙と共に回遊式庭園の空間使用の面白さなどどこでも聴けるものではありません。さて、回遊式庭園は廻り遊ぶ空間使用です。園路は移動しながらストーリーをもって公園の広場や施設、その景色を愛で次の目的地へ誘導する機能を有する大事な施設です。明治以降の近代公園の設計において、「園路はただ単に行通の便宜上のみならず園の各部を連結して全園を一図形として統一する重要な役目を持っている」と「住吉公園を作った男」大屋霊城に言わしめています。

今年の2月大阪中の島公会堂で建築家の横文彦さんの講演会が行われ、それを受けて他分野の方を含めた数人がパネラーとして話をする機会がありました。当センターの理事でもある鳥取環境大学の中橋文夫先生が中心となって企画された講演会です。横さんの作品は現在大阪にはこの2つしかないことを後で知りましたが、堺市泉北ニュータウンの中にある考古資料館と高石にある浜寺公園の隣接する府立スポーツセンターです。これを機会に俄か勉強で急遽尋ねてみました。横さんの設計哲学は「無償の愛」であり、建築・ランドスケープ・まちづくり・造園などの領域は問わずこよなくオープンスペースを愛されることであると紹介さ

れています。二つの作品にみられる建物には作品として独り歩きをせず、必ず屋外の風景を取り込むと同じくして、またその建築物は公園やまちの風景に溶け込んでいる「脇役」の魅力を感じたことを話しました。横さんは最後に、「垣根のないユニバーサルデザインの国際コンペを提案したい」と結ばれました。

風景には山や川、街の建物や庭も森も道などたくさんの要素がありますが、人にやさしく、街の風格を築き上げるためにはそれら要素を繋いで図形として統一するためにランドスケープには「垣根のない」取り組みが必要だと思っています。



横文彦講演会が終わって 横さんとパネラー達

みどりを取り巻く町の宝探し！ 「関西みどり探訪」

第3回 大阪府営住吉公園と大阪初の総合都市計画の面影を訪ねて

令和元年6月22日(土)集合場所の南海本線住吉大社駅を、繁村、大槻の2名で出発。まず、住吉公園管理事務所へ行き、開催中のマルシェの主催者を紹介していただき、その話を伺った。

その後、住吉大社へ。境内の諸神社を回る。クスノキの大木が多く、大阪市南部の貴重なみどり空間になっているのを実感した。(右写真)

熊野街道の景観を楽しみつつ歩き、太田家の土蔵を見てさらに北へ。南海本線帝塚山駅前を西へ進んで帝塚山古墳へ行く。古墳は4C末から5C初めの築営と推定され、前方後円墳の原型をとどめる貴重な古墳で、1963年、国の史跡に指定された。当初の規模は全長120m、後円部の直径57m、高さ10m、前方部の幅50m、高さ8mであったと推定されている。訪れた時は、2018年の21号台風で樹木が倒れたようで、無残な姿をさらしていたが、かえって地形はよく分る。(左写真)

古く住吉近辺は玉出岡と称したことから、この塚は玉手塚とも呼ばれ、そこから手塚山、そして現在の地名「帝塚山」の元になったという。

1928年には古墳の周囲を含む地域を史跡公園として整備し帝塚山公園とする都市計画事業が立ち上がったが計画は中座している。

大阪城から続く上町台地の南端に住吉大社があり、その少し北の台地上のピークのひとつに帝塚山古墳がある。そのため、古墳の北側に西に下る急な坂道がある。これが上町台地の西側の段差である。

「坂」を楽しんだ後、万代池公園へ。万代池を半周してJR鶴ヶ丘駅前から長池公園へ向かう。

1928年の総合大阪都市計画では、公園と公園を結ぶ公園道路によるネットワークの構想を打ち出した。その中で戦前に実現した数少ない公園道路の面影が今も偲ばれる場所が長池公園に残っている。約半世紀後の1980年に既成市街地としてはわが国最初の歩車共存のコミュニティ道路として整備されたが、公園道路の骨格が活かされていると判断され、その区域の緑の濃さが印象的である。(右写真)

南田辺駅で3人目の参加者鮫島さんが合流。3人で桃が池公園へ。二つの島によって三分割されたような池の織り成す景観が楽しめる公園である。その後、地下鉄谷町線の文の里駅前で解散した。

今回は、古い歴史スポットと公園が点在する、また大阪らしい情緒と有数の高級住宅街の織り成す、大阪市内ではまれな比較的緑の豊かな地域を歩くことによって、都市のみどりのあり方を考えるこの企画に相応しい一日となった。

第4回の関西みどり探訪は「服部緑地と周辺のみどりを訪ねて」をテーマに令和元年11月20日(水)に行ったが、これについては国際造園研究センターのフェイスブックに掲載したので、そちらをご覧ください。(大槻 憲章)



2つの大きな講演会を開催



進士五十八氏 公園革命 ― これからの社会と造園・ランドスケープ界への期待 ―

やや沈滞ムードにある関西造園界に喝を入れていただく意図で、造園・ランドスケープへの鋭い見識と論説を発表されて、実社会のオピニオンリーダーとしても活躍されている福井県立大学長進士五十八氏を迎え、表題のようなセンセーショナルな演題の講演会を開催した。

令和元年6月15日(土)午後、大阪歴史博物館講堂で始まった講演会には60名を超える参加者があり、第一部の進士五十八氏の講演と第二部のパネル討論のいずれも会場は熱気に包まれ、講演会終了後の交流会も盛況で大変有意義な会となった。

進士氏の講演は、公園革命とは何か、なぜ今公園革命が必要か、私たちはどう対応すべきか、等々、パワーポイントと資料を駆使して、時間いっぱい熱く語られた。その趣旨は「(今公園が置かれている環境は)時々のニーズに応えるべく部分的改良や新規設備を導入しておけばそれで良い、といったレベルでは済まない。あえてこれからは従来からの公園理解の延長上でなく、思い切り大胆に大変革をめざすべきだろうという点で、【公園革命】という言葉方で考えてみるべきではないか―」という時代認識と問題意識である。また新しい公園像については、江戸時代の発明である「大名庭園―回遊式庭園」はひとつのモデルとなるとの指摘。

第二部では、宮崎政雄(大阪府鳳土木事務所)、片木孝子(株空間創研)、山崎有美子((一財)大阪府公園協会)の若手3名の発表を受けて、コメンテーターである進士五十八氏が、「それぞれ置かれた立場でしっかり造園関係の仕事に取り組んでいることは評価できる。しかし、このままでいいのか? という視点を忘れずに精進すること」というコメントもあり、最後まで進士節が炸裂する会となった。

進士氏の招へい、会の事前準備、司会進行等に尽力された中川美陽子理事には特に御礼を申し上げたい。



吉田昌弘氏 喜寿記念講演会

吉田昌弘氏は、国際造園研究センター創設以来20年近くにわたり、理事、副理事長、理事長として、また庭園文化塾主催者として、センターの運営に力を発揮され、昨年の総会で理事長を辞され顧問となられた。この年が氏の喜寿に当たるということもあり、令和元年12月12日(木)午後、谷町センタービル1階会議室において「吉田昌弘氏・喜寿記念講演会―なぜこの世界に入ったのか? その志を未来に伝える―」という講演会を開催した。

会場一杯となる50名の参加者があり、氏の講演に続く意見交換の時間には多くの方々からの質問、意見とともに感謝の言葉も語られ、非常に充実した時間が持てた。



講演の話題は、氏が日本造園学会上原賞を受けられた時の作品・資料がベースとなっており、非常に内容の濃いものではあるが、ここでその内容を記載するにはスペースが足りない。当日の資料は国際造園研究センターに若干の控えがあるので、必要な方は申し出てもらいたい。

また講演会に続く祝賀交流会も、定員を超える参加者があり、氏を中心に楽しい交流・交歓の時間が持てたことを一言付け加えておく。(糸谷 正俊)